

ヒトメタニューモは「ただのかぜ」か 専門家に聞く「感染増加」と「重症化」を警戒すべき3つの理由

<https://dot.asahi.com/articles/-/247350>

中国で「ヒトメタニューモウイルス感染症」の患者が増えていると、世界保健機関(WHO)が報告した。インフルエンザと喘息を合わせたような症状が特徴の、呼吸器系感染症を引き起こすウイルスで、「日本でも増える可能性がある」と専門家は指摘する。

春節が始まり90億人が移動する

ヒトメタニューモウイルス。

耳慣れない名前ゆえに、「中国で『未知のウイルス』流行の懸念」と報道する海外メディアすら見かけた。コロナ禍が明けて1年半あまり、ウイルスと聞けば警戒する心理も頷ける。

いま世界が懸念するのは、中国では今月末から春節(旧正月)が始まり、延べ90億人(同国政府の推計)が国内外を移動することだ。

日本にはインバウンド客が増えている。今後、ヒトメタニューモウイルスは日本でも流行するのか。ヒトメタニューモウイルスとは何なのか。

ヒトメタニューモはかぜのウイルス

元北海道大学病院・感染管理室長で小児科医、医学博士の菊田英明医師はこう話す。

「ヒトメタニューモウイルスとは、国内どこにでもいる『かぜのウイルス』です」

新種のウイルスではなく、これまでも各地で報告されている呼吸器系感染症を引き起こすウイルス——。それが、新型コロナウイルスとの決定的な違いだという。渡航を制限しても感染拡大防止に寄与しないとみられ、WHOは「渡航制限を行わないように勧告」している。

特に子育て世帯にとって、ヒトメタニューモはなじみの病気の1つだという。

「お子さんを病院に連れてきたお母さんから、『保育園でヒトメタが出ました』と、言われることは珍しくありません」(菊田医師、以下同)

主に気道に感染

ヒトメタニューモウイルスは主に鼻から肺にかけての「気道」に感染する。特に乳幼児や高齢者は気管支に感染し、炎症を起こす。炎症を起こした部位からの分泌物(たん)が増え、気管支をふさぐため、呼吸が苦しくなる。高熱も出る。

「喘息に似た、ゼイゼイ、ヒューヒューという呼吸音が特徴的な症状です」

症状は、子どもがかかりやすいRSウイルス感染症と酷似している。ヒトメタニューモと確定するには鼻の粘液を採取して、迅速診断キットで調べる必要がある。その際、「6歳未満で肺炎が疑われる場合」、診断キットは保険適用となる。

特効薬はまだない

特効薬はまだないため、症状に応じた対症療法がとられる。

「子どもの場合、重症例は 39 度ほどの高熱が 5 日ほど続くことが多い。解熱薬を使っても効かなくなると、また熱が上がる。無理して食事をとらなくてもいいので、水分補給だけは十分にしよう保護者に伝えます」

5 日以上高熱が持続し、肺への細菌感染(二次感染)が確認されれば、抗菌剤の投与が必要になる。呼吸が困難になれば即、入院して治療する。

リスクを軽視すべきではない理由とは

患者の多くは軽症ですむ。

ただし、「感染増加」と「重症化リスク」を軽視すべきではないと菊田医師は指摘する。

理由の 1 つ目に、体力の低い子どもや高齢者がかかりやすいこと。2 つ目に、ワクチンや特効薬はない、ということだ。

「悪化すると肺炎を引き起こし、酸素吸入などの呼吸管理が必要になります。注意すべきは免疫力の落ちた高齢者です。介護施設内で集団感染が報告されることがあり、亡くなる人もいます」

誰もが感染歴あるはず

ヒトメタニューモウイルスは 2001 年にオランダの研究者グループによって発見された。遺伝子解析によれば、ヒトメタニューモウイルスは 200 年ほど前に出現したと推定される。

当時、北海道大学医学部小児科学講座助教授だった菊田医師は日本で初めてヒトメタニューモウイルスの研究に乗り出し、先の迅速診断キットの開発も手掛けた。

「成人であれば、これまでに何回もヒトメタにかかったことがあるはずですよ」と、菊田医師は言う。

記者はこれまで「ヒトメタニューモ」と診断されたことは 1 度もない。

「ヒトメタの感染がわかるようになったのは、迅速診断キットができた 10 年ほど前からです。今でも軽症なら『ただのかぜ』と、診断されるでしょう」

人は乳幼児期にさまざまな呼吸器系ウイルスに感染し、それを繰り返すことで次第に免疫を強めていく。しかし、感染を完全に防ぐ持続的な免疫は獲得できないため、生涯にわたって感染を繰り返す。かぜやインフルの罹患を思い起こせば、わかるだろう。

感染力はインフルエンザと同程度

ヒトメタニューモには生後 6 カ月ごろから初感染し、2 歳までに 50%、5 歳までに 75%、遅くとも 10 歳までに誰でも 1 度は感染するとみられるという。

インフルエンザや新型コロナと同様に、空気を介して、もしくは接触によって感染する。ヒトメタニューモとほかのウイルスを重複して感染する場合もある。

「感染力はインフルエンザと同程度といわれています。ワクチンはないので、マスクや手洗いを徹底しましょう」

免疫が低下した理由は

感染に警戒すべき3つ目の理由が、ヒトメタニューモウイルスに対する免疫の低下だ。

ヒトメタニューモは通常、インフルエンザがはやった後の2~6月に流行する。海外でも同様だが、今回の中国での流行は昨年末からなので、時期が早い。

菊田医師は、「新型コロナウイルスの影響かもしれません」と言う。

たとえば、インフルエンザは例年11~12月ごろから感染が広がる。しかし、23年は残暑の厳しい9月から学校を中心に感染者が急激に増えた。コロナ禍の間にインフルエンザが流行しなかったため、インフルエンザに対する免疫が低下したことが原因の1つと見られている。

例年であれば、ヒトメタニューモの流行シーズンは来月からだ。インフルエンザとは異なり、全国の定点医療機関を受診した患者数は把握されない。

「ヒトメタニューモの患者は札幌の医療機関でもぼつぼつと出てきていると聞いています。今年の流行は例年より大きくなるかもしれません」

インフルエンザ同様、コロナ禍の間、ヒトメタニューモウイルスの患者は例年より少なかった。子どもたちのヒトメタニューモウイルスに対する免疫が通常より弱まっていると考えられる。

「感染者数が増えるので、流行の人数のピークは高くなるかもしれません」

全国的にインフルエンザの患者が急増している。ヒトメタニューモの患者が加われば、医療機関がひっ迫しかねない。感染防止には留意したい。

(AERA dot.編集部・米倉昭仁)

HP: <https://doctor.99soudan.net> に戻る